

氏名	粕谷圭佑
学位の種類	博士(教育学)
報告番号	甲第556号
学位授与年月日	2021年3月31日
学位授与の要件	学位規則(昭和28年4月1日文部省令第9号) 第4条第1項該当
学位論文題目	初期学校的社会化過程の相互行為論的解明 : 幼稚園年少級の初期場面に着目して
審査委員	(主査) 秋葉 昌樹 (立教大学大学院文学研究科教授) 渡辺 哲男 (立教大学大学院文学研究科教授) 前田 泰樹 (立教大学大学院社会学研究科教授)

I. 論文の内容の要旨

(1) 論文の構成

- 第1章 序論
- 第2章 先行研究：教育のエスノメソドロジー研究
- 第3章 フィールドの概要と調査方法
- 第4章 ルーティン的活動の構成：幼稚園年少級における「おあつまり」場面の分析
- 第5章 集団的活動の教示：幼稚園年少級における「列になる」練習場面の分析
- 第6章 個人作業を導く一斉指導：幼稚園年少級における製作場面の分析
- 第7章 児童的振る舞いの観察可能性：小学校6年生の「お説教」場面の分析
- 第8章 結論と展望

(2) 論文の内容要旨

本研究の主題である初期学校的社会化は、社会化研究の一環として行われるものであるが、教育社会学における幅広い理論枠組みとして機能してきた社会化研究は、時代の変化とともに現実に対する説明力を失ってきた。そこで、本研究では従来の社会化研究の着眼点を活かしつつも、説明力を失ってしまった方法論に依拠するのではなく、これに取って替わるエスノメソドロジー研究の立場で研究を進めている。

そのため本論文における社会化の研究は、学校的な振る舞いを身につけていく過程で生起していることについて、保育者/教師と園児/児童との相互行為の成立過程に分け入ることで分析的に進められていく。それは具体的には、幼稚園入園間もない園児たちの「おあつまり」活動の分析であり、集団活動の初期段階で重要な「列になる」課題の達成過程の相互行為的分析であり、「製作」活動における指導場面における知識の修得過程の相互行為分析、さらには社会化がある程度達成された段階での小学生に対する担任教師による「お説教」場面の相互行為分析により解明されている。

論文は全体で8章から構成されているが、前半の3つの章は、テーマである初期学校的社会化過程に研究の照準を合わせ、その過程を解明する上で、エスノメソドロジー研究に導かれる相互行為論に基づきつつ議論を進める理由が示されている。順に、問題の所在、先行研究の検討と本論の立場、調査対象のプロフィールと続いている。

続く4つの章では、フィールドデータに基づく初期学校的社会化過程の相互行為分析が展開する。順に、まず幼稚園入園間もない園児たちを対象に行われる「おあつまり」活動の継時的分析が、つぎに、初めて「列になる」ための活動を行われる際の保育者の指示と園児の応答の相互行為の成り立ち方が分析される。さらに「製作」活動における保育者の指示と園児の応答が共有知識へと高められていく様相が分析される。続く章では小学校の教室場面で生じた「お説教」場面にみられる児童の社会化の達成のされ方が分析される。

論文は最終章で、分析編とも呼びうる4つの章の成果を踏まえて初期学校的社会化を相互行為過程として分析することの意義が示されている。なお「おあつまり」と「お説教」の分析は全国誌の査読論文を再構成したものである。

Ⅱ. 論文審査の結果の要旨

(1) 論文の特徴

本研究の特徴は大きく分けて3つある。

1つめは、この研究が社会化研究をエスノメソドロジーの方法論に依拠して進めている点である。このことによって、社会化の研究をフィールドワークデータに基づき具体的に展開することにつながったことである。

2つめは1つめの特徴によりもたらされることであるが、本研究は保育者/教師と園児/児童との相互行為過程を継起的に分析することで、これまでの社会化研究が踏み入れることのなかったミクロな過程にまで分け入り細密な検討が可能になっている点である。

そして3つめの特徴として研究の臨床性が挙げられる。上記2点の特徴により、社会化過程という学術的概念(=「二階の概念」)によらず、より実践に近い概念(=「一階の概念」)である「できるようになる」「なじむ」「まとまる」「覚えた」過程として相互行為過程を記述することで、研究知見を実践現場に還元しシェアしうる臨床的研究とすることに成功している点である。

(2) 論文の評価

本研究は教育社会学において理論的にも経験的分析においても膠着状態にあった社会化研究のブレイクスルーとなる可能性を秘めた意欲的研究である。すなわち社会化の過程をデータに基づき細密に分析し、教育現場に通用することばで記述することで知見を現場とシェアすることで、実践者自身が実践のさなかに「見て知っているが気づかない」実践上のコツや問題点をあぶり出し、気づきをもたらす研究となっているところである。このことは本研究がエスノメ

ソドロジー研究として行われたことによってもたらされたものであるが、具体的には粕谷氏がフィールド現場において丹念な参与観察を行い膨大なトランスクリプトデータを作成し、これをもとにした分析をすることで成し遂げられたものである。このように、初期学校的社会化の研究を学問世界に留まらずに実践現場に馴染み深い概念で記述し得たことは、今日の教育社会学研究において重視されるポイントの1つである研究の臨床性を備えることにもつながっていると見える。

以上のおおりに、本研究のオリジナリティは非常に高いものであり、各章における相互行為場面の考察も堅実かつ説得的なものになっており、「博士（教育学）」を授与するに値する内容であると、審査員一同、一致して評価するところのものである。